法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

能界展望(昭和50年)

西野, 春雄

(出版者 / Publisher)
The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University / 野上記念法政大学能楽研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Nogaku kenkyu : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究 : 能楽研究所紀要
(巻 / Volume)
3
(開始ページ / Start Page)
143
(終了ページ / End Page)
151
(発行年 / Year)
1977-03-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00020270

能界展望（昭和50年）

西野春雄

能楽隆盛

この数年、演能会は年ごとに増加し、観客層も年を追って拡大しているが、昭和五十年の能楽界は、こうした傾向が一つのピークに達した年といえようか。玄人会・素人会、有料・無料を問わず、全国各地での催しの数をかぞえてみると、一年三六五日のうち約二九〇日間、どこかで何かの会が開かれており、公演回数も主なものだけで七七六回に及ぶ。能繁期の9・10・11月のみならず3・5・6月も目白押しの盛況で、〝能ははやり過ぎている〟という声も聞かれるほどだ。催会も多種多様で、諸流諸家の定期会や別会をはじめ、同門会や後援会、研究会に鑑賞会、劇場能、狂言尽くしの会に囃子会もある。還暦・古稀・喜寿・米寿などの祝賀能、三回忌・十七回忌・二十五回忌・はては三百回忌などの追善会や、雪号披露、斯道五十年、舞台建立四十年などの記念能も多く、〇〇薪能と銘打った納涼気分の野外能も各地に盛んで、約20箇所近く開かれたし、海外能はすでに年中行事化している。

さらに、こうした催会の増加や観客層の拡がりと呼応するかのように朝日カルチャーセンター「能を知るよろこび」、能楽懇談会主催の公開講座「能の演出」、東京・大丸デパートでの能フェスティバル「能・幽玄と情念の花」などの教養講座・能楽講座・展覧会があいついで開かれ、いずれも異常なほどの盛況を呈した。昭和50年の能界は、このような啓蒙普及の動きも活発な年であった。こうした活況は昭和38年の世阿弥生誕六百年以来の事かもしれない。

また、喜多実氏が芸術院会員に就任した(12月15日付)。前年の野村万蔵氏に次ぐ慶事で、喜多流では六平太についで二人目。これで能楽関係の芸術院会員は幸祥光（昭40・11）・梅若六郎（昭41・1）・野村万蔵(昭50・11)の三氏に喜多氏を加えて四人となった。一方、日本能楽会（重要無形文化財総合指定）会員の第五次増員があり、現会員数一八七名に、新たに一一六名が指定をうけ、一挙に倍増した。これも能界の賑いに拍車をかけたといえようか。

こうした活況や慶事を列挙するかぎり能界は隆昌の一途を辿っているように思われるが、催しの賑いが必ずしも舞台の質的向上に結びついているとはいえないようである。何となく過密ダイヤを連想させ、空しい芸の浪費とうつることも稀ではない。質量ともに充実した舞台を現出させていただきたく思う。

一方、悲しいニュースも続いた。シテ方観世流の重鎮岡久雄・浅見重信両氏をはじめ、児童文学者の那須辰造氏、能楽養成会々長・信貴英蔵氏、能面作家・入江美法氏、能楽画家・仙田雪山子氏、鴻山文庫主人の江島伊兵衛氏の死去である。能界はかけがえのない方々を次々に失った。能楽研究所の顧問でもあられた江島氏の死去は、研究所にとって誠に残念でならない。

啓蒙普及の動き

近年の観客層の広がりと呼応するかのごとく能楽講座・展覧会など啓蒙普及のための催しがあいついで開かれたことも目立った。いずれも超満員の盛況。関東を例にとると、まず①4月から9月にかけて講座「能の美を探る」が日本生涯教育センター・横浜アカデミーで開かれ（講師・松田存）、②朝日カルチャーセンターでは9月6日から毎週土曜の夜、12回にわたって講座「能を知るよろこび」が定員100名を遙かに超えて開講されたという（講師・小西甚一・馬場あき子・堀上謙・横道萬里雄・長尾一雄・金春惣右衛門・増田正造・山崎有一郎・野村万作・小林責）。続いて③能楽懇談会主催の第一回公開能楽講座「能の演出」が11月15・22日、矢来能楽堂で開かれたが、一か月前に定員300名に達するほどでここでも能に対する関心の強さが伺われた（講師・横道萬里雄・増田正造・観世静夫・松本恵雄ほか）。

さらに、④11月6日から11日まで能フェスティバル「能―幽玄と情念の花」展が大丸デパート・東京店で開催された（主催―大丸・能フェスティバル実行委員会。後援―文化庁・東京都・能楽協会。協賛―武蔵野女子大学能楽資料センター）。芝・増上寺境内での前夜祭〝薪能〟をはじめ、写真家・金子桂三の能の写真を主体に、五流宗家・銕之丞家・梅若家・三井家蔵の能面、山本・野村・三宅家の狂言面、山形県黒川の能・狂言面など約40点と、主に金剛家の装束の展示と、装束着付の実演、舞囃子、能の映画、面打の実技公開など、多彩な内容。ことに豊臣秀吉愛蔵の面と称される〝花の小面〟（三井家蔵）と〝雪の小面〟（金剛家蔵）の同時出品が話題を呼び、実に三万人を超える観客動員だったという。

③④の講座・展覧会は、より実際的に能の技法の解明に力を注ぎ、視聴覚に訴えようとする姿勢が強く感じられた企画であった。

記念能のにぎわい

常の催しの漸増はむろんのこと、祝賀・追善などの記念の催しも、ここ数年目立って多くなっている。そうした記念の会には秘曲・稀曲・大曲の類が上演される場合が多い。月並の会に新演出や古態の復活をさりげなく試みる会も稀にあるが、多くは記念能に御馳走をならべる。50年の能界も特別料理いっぱいの催しに明け暮れした感じで、この傾向は当分続くのではなかろうか。以下、目についた主な舞台を拾ってみることにしよう。

まず、2月22日に井上嘉介二十三回忌追善会が催され、井上嘉久は「木曽願書」を舞い、3月1日の同会には「通小町雨夜ノ伝」を舞った（京都・観世会館）。2月26日には茂山千作が八十歳の祝賀狂言会に「三番三」を勤め、孫の真義が「花子」を披いた（同上）。3月9日の片山博通十三回忌追善能には、杉浦元三郎「清

経恋ノ音取」、片山博太郎「姨捨弄月ノ舞」、慶次郎「融思立ノ出舞返ノ伝」が上演され（同上）、3月23日の先代金剛巌二十五回忌に金剛巌が「道成寺古式」を舞い、永謹が「安宅滝流延年之舞」を初演した（金剛舞台）。なお、50年の京都での催しのなかでは、10月30日に西本願寺の鴻ノ間で座敷能が復元上演され、片山博太郎が「千手郢曲ノ舞」を舞い、息清司が「経正」を舞ったことも特筆したい。

一方、東京では3月21日から三日間、水道橋能楽堂再建二十五周年の記念能が同舞台で催された。戦災で焼失した宝生会舞台が諸舞台復興にさきがけて昭和25年3月に再建されてから、すでに25年目を迎えたわけで、初日・初番の「高砂翁なし」を筆頭に在京職分が総出演し、連日、能四番・狂言二番の盛大な記念能であった。主な曲目をあげると、「高砂翁なし」野口禄久・宝生閑、「安宅延年之舞貝附貝立」宝生英雄、「三笑」高橋進など。

4月19日には大阪で大槻能楽堂建立四十周年記念別会が開かれ、「蟬丸替ノ型琵琶ノ会釈」梅若六郎・観世喜之、「道成寺」大槻文蔵、「大瓶猩々」大槻秀夫などが上演された。また、8月24日には熱田神宮能楽殿二十周年記念能も開かれている。

5月には観世宗家から藤波順三郎に雪号が許され、その披露記念能が同25日、観世能楽堂で催された。順三郎は一調「放下僧」を幸祥光の小鼓で勤めたほか、重和が「道成寺赤頭」、重満が「安宅勧進帳滝流ノ伝」を舞った。雪号は、古来、流儀に功績のあった弟子家に宗家から授けられる称号で、順三郎は〈紫雪〉を名のった。なお、雪号については表章氏の「観世流『雪号』考」（『観世』6月号）が詳しい。

5月28日には、明治・大正・昭和と能楽言論界で活躍した斎藤香村の二十三回忌追善能が水道橋能楽堂で催され、高橋進の「羽衣盤渉」、梅若六郎・幸祥光の一調「鐘之段」、野村万蔵の「名取川」に、斎藤香村作詞の新作能「竜の口」が喜多実によって演じられた。

6月15日には、ワキ方下掛り宝生流の重鎮であり人間国宝の松本謙三が喜寿・斯道六十五年記念の霞会を主宰し、謙三は「弱法師」高橋進、「羽衣彩色ノ伝」橋岡久馬、「土蜘蛛入違ノ伝千筋ノ伝」金剛巌の三番のワキを元気に勤めた（水道橋能楽堂）。

橋岡久太郎十三回忌追善能も3・5・6・9・10月に名古屋・東京でそれぞれ開かれ、6月22日には孫の久春が「海人窕」、9月27日には久馬が「山姥白頭長杖ノ伝」、久春が「乱」を舞い（以上、水道橋能楽堂）、9月15日に久共は「清経恋ノ音取」を舞った（観世能楽堂）。また山本博之の三回忌追善能も名古屋・大阪・東京・福岡の各地で催され、10月18日には勝一が舞囃子「当麻」を舞い、順之が「砧」を初演し、他に観世元正が「敦盛二段ノ舞」、観世寿夫が「鵜飼空ノ働」を舞った（同上）。

10月24日には葛野流大鼓の名手・亀井俊雄の七回忌追善囃子会が開かれ、各流各役の長老・中堅・若手がそれぞれ味のある舞台を展開した（梅若能楽学院）。また山口直知十七回忌追善能（戸畑）・種田追善能（初代嘉三郎50回忌・二代一二13回忌。金剛舞台）などもあった。

このようにたくさんの追善能が賑々しく開かれたが、50年の最

大の追善能は二世梅若実十七回忌追善能であろう。2月の名古屋、3月の京都・東京、6月の山形、10月大阪・福岡、11月再び東京と、各地で催された。とくに11月8日には梅若六郎が秘曲「関寺小町」を初演した。観世流での同曲の東京上演は実に50年ぶりという。各役ともに初役。これで六郎は三老女を全部舞うとともに、観世流の能の全曲を舞いおえた。驚異的な記録である。

そのほかの記念能では、太鼓方観世流の小笠原八郎、小鼓方幸流の穂高光晴の還暦祝賀能が囃子科協議会主催で開かれ（2月1日。観世能楽堂）、幸祥光の小鼓一調「玉葛」（高橋進）、観世元信の太鼓一調「金札」（観世元昭）などが演奏されたし、シテ方観世流・武田小兵衛古稀祝賀記念能（9月24日。観世会館）やシテ方観世流女流能楽師・今井多希の米寿祝賀能もあった（10月26日。矢来能楽堂）。その今井の師匠観世喜之は舞台生活七十年を記念して、喜之「鷺」、嗣子武雄「熊野読継ノ伝村雨留・膝行」、孫喜正「合浦一拍子ノ伝」の、三代能を催した（4月13日。同上）。

狂言界でも大きな追善の会があった。10月11日、水道橋能楽堂で催された、十四世大蔵栄虎三百回忌追善大蔵会がそれで、弥太郎は「蜘盗人」、基嗣は「毘沙門」を勤め、基義が「釣狐」を初演した。当日は、ほかに宝生英雄の「八島那須語」、金春信高の「道成寺」、喜多実の「張良」、舞囃子・小舞などが上演され、賑やかな追善会であった。ちなみに十四世栄虎は寛永六年（一六二九）、虎明の嗣子として江戸に生まれ、延宝四年（一六七六）六月、四十八歳で没している。　また、和泉流野村又三郎の舞台五十年記念の会もあった（10月18日。熱田神宮能楽殿）。

薪能ブーム

初夏から秋にかけて各地の神社・仏閣・城郭などで「薪能」と称する野外能・納涼能が盛んに行なわれるようになったのもここ数年の傾向であろう。本家格の奈良・興福寺の薪能（5月）を別格として、昭和50年は左記の19箇所で開かれた。

川崎大師薪能（5月）、　京都薪能（6月）、　堺薪能・宇治薪能・ユニセフ薪能（以上7月）、　神戸薪能・名古屋薪能・姫路薪能・東京薪能・大阪薪能・納涼能〈京都〉・相模薪能・中尊寺薪能・石和薪能・須磨離宮公園野外能（以上8月）、　甲府薪能・近江神宮薪能・鎌倉薪能（以上9月）、　芝増上寺薪能（11月）

各地ともしだいに定着しつつあるようで、例えば昭和43年に始まった鎌倉薪能（鎌倉宮）は、近年でこそ大変な人気だが、最初の数年間は観客もまばらだったという。それが古都鎌倉の環境と薪能のムードに魅せられてか、しだいに人気を呼び、無料招待券の申込みが全国から殺到。50年は定員二四〇〇人（二日間）のところへ四六七〇〇人もの申込があって約20倍の競争率となった由。こうした傾向は各地ともますます強くなっていくようである。

北陸狂言会の発足など

11月には金沢に北陸狂言会が発足した。金沢での狂言は、これまで金沢狂言会（代表・能村祐丞）が中心になって行なわれていたが、北陸狂言の継承保存と普及発展を意図して、10月に同会を

発展的に解消させ、石川・富山・福井の北陸三県に在住する狂言師が中心となって〈北陸狂言会〉を組織した。指導は野村万之丞があたっており、野村万蔵を初めとする野村一門を招いて、年四回程度の公演を行うという（金沢で2回、富山・福井で各1回）。

第一回公演が11月22日、石川県立金沢文化会館で開かれ、「三番叟」野村万之丞、「蝸牛」野村万蔵・万之丞、「牛盗人」野村万蔵・万之丞・耕介、「成上り」能村祐丞・野村万之丞、「猿聟」能村英丘・増田秋雄が上演された。

一方、七年間（13回）続いた「和泉新宿狂言の会」が11月19日の公演を最後にその活動を終えた。当日は三宅藤九郎「見物左衛門」、山本東次郎らの「千鳥」ほかを上演（新宿・紀伊国屋ホール）。

国立能楽堂のこと

永年の悲願である国立能楽堂の設立に関し、文化庁は昭和49年に芸術文化専門調査会を発足させ、能楽の保存・振興、国立能楽堂建設問題などを討議してきたが、50年には能楽部門の専門小委員会を発足させた。専門調査委員から、大河内俊輝・表章・遠藤慎吾・小山弘志・成田喜澄・広瀬信太郎の各委員が選ばれ、能楽協会側から理事2名が交替で出席し、新たに小林責・増田正造・森晋六・山崎有一郎の各氏が加わった。数度、委員会を重ね、討議事項をまとめて答申書を作成し、文化庁長官へ提出した（「月刊文化財」50年11月号参照）。

他方、能楽協会・日本能楽会・人間国宝・芸術院会員らによる陳情も繰りひろげられた結果、51年度予算作成の過程でようやく国立能楽堂設立準備調査費として一六〇万円が大蔵省から内示された。これに伴い、前記調査会はその使命を終え、51年度からは新たに国立能楽堂設立準備協議会が発足する運びとなった。待望の国立能楽堂建設はいよいよ実現へ向けて大きく歩みはじめたといえよう。

日本能楽会々員の増員

重要無形文化財「能楽」の総合指定の保持者で構成されている社団法人「日本能楽会」の第五次増員が、1月30日の同会審議会（審議委員藤浦富太郎ほか）で人選を行い、同31日付で各人へ発送、2月末日までに諾否を回収し、文化庁を経て決定された。その結果、現会員数一八七名に一一六名が追加され、約倍増し三〇三名に達した。今回は各役各流儀の適格者の増加に伴う増員であるが、とくに、①適格者でありながら未会員のシテ方観世流能楽師を増員して均衡を保ったこと、②九州地区の適格者を増員したこと、などが特色といえよう。今回指定されたのは次の方々である。（敬称略。年齢順。）

シテ方（92名）

〔観世流77〕宇治正夫・丹下直次郎・＊福田源平・平野千賀・佐藤元章・工一菊松・波多野敞・＊梅若新太郎・井田文二・小宮利一・下川勝一・小田切梧陽・若松宏守・田村勇・亀山雅臣・小山敏夫・松山長昭・塩谷武治・井戸良造・小早川泰士・井上基太郎・分林保三・角栄次郎・佐伯栄造・久保田種雄・足立清春・井本完二・永島誠二・吉田佳弘・松野良輝・

石井満一・羽瀬清・宮永恒一・小西保二郎・阿部正行・坂口雅介・大山順造・竹前嘉房・小林義明・川田八郎・松平義男・矢代寿弥・青木祥二郎・郷郭太郎・金子順行・染谷宗孝・高橋正次・多久島利吉・二宮禎護・谷本正鉦・渋谷晴一・前田行夫・泉成佳・勝部全一・岡田朗詠・小島芳雄・古橋正士・五木田武計・南条秀雄・河村禎二・武田安弘・浜野金峰・八木康夫・田辺竹生・河村晴夫・泉嘉夫・木内菁・白滝康・三宅昭男・小寺一郎・河村隆司・泉泰孝・吉井順一・生一泰知・谷村一太郎・杉浦元三郎・観世武雄〔金春流2〕松井閑花・高橋汎〔宝生流8〕山田太佐久・内藤泰二・馬縅富四夫・渡辺容之助・本間英孝・高橋章・高橋勇・三川淳雄〔喜多流5〕狩野勇雄・笠井改・太田嘉雅・粟谷辰三・粟谷幸雄

ワキ方（5名）

〔高安流2〕大山要二郎・山崎俊輔〔福王流1〕指吸雅之助〔宝生流2〕殿田保輔・宝生閑

笛方（4名）

〔一噌流1〕栖崎平造〔森田流3〕貞光義明・野口浩和・光田洋一

小鼓方（5名）

〔幸流1〕住駒明弘〔幸清流1〕本田三喜雄〔大倉流2〕北村治・黒田勝〔観世流1〕敷村鉄雄

大鼓方（4名）

〔葛野流1〕三王礼夫〔高安流3〕宮原康寿・柿原繁蔵・加藤良助

太鼓方（1名）

〔金春流1〕滝本悠雄

狂言方（5名）

〔大蔵流2〕王丸治三郎・古川七郎〔和泉流3〕佐藤卯三郎・井上礼之助

（現会員数の役別内訳はシテ方一九一名・ワキ方一九名・囃子方六八名・狂言方二五名。なお、＊印の福田源平・梅若新太郎氏は死去された。）

能楽養成会の新役員

信貴英蔵会長の逝去にともなう能楽養成会の新役員が次のように決定、9月8日付で発表された（敬称略）。

会長・広瀬信太郎　副会長・長野善三　常務理事・檜常太郎・江島尤一　理事・稲垣平十郎・臼井経倫・歌橋憲一・江草四郎・垣内太七郎・古池信三・古藤文三・捧精作・佐藤芳彦・田島武長・武内米子・登坂親義・藤浦富太郎・真壁喜三郎・丸岡大二・茂木佐平次・渡辺昭　監事・天野源七・中山幹朗　顧問・江島伊兵衛（10月10日没）

また大阪能楽養成会の新会長には野崎道郎が就任した。

海外公演

海外での公演もすっかり定着した感がある。昭和50年も①アメリカ・カナダ親善能楽団（団長・喜多節世）、②野村狂言団（代表・野村万作）、③日本能楽団（団長・梅若万三郎）の三公演が

あった。①②とも国際交流基金の援助による。①は団長以下10名という小人数の編成ながら、演能のほかに講義もまじえ、ブリティシュコロンビア・トロント・コーネル・モントレーの各大学での上演も特色の一つ。②は野村万之丞・万作を中心とし野村又三郎、大蔵流の茂山千五郎・正義らも加わり11名の編成。3月30日のシカゴから5月18日のリオディジャネイロまでカナダ・アメリカ・中南米各地で計38回の公演を行った。③の日本能楽団は五度目の海外公演で、8月28日から9月23日の約一ヶ月間、イラン・スイス・ユーゴスラビア・西ドイツの四ヶ国六都市で公演し、ことにイランのシラーズフェスティヴァルに能が初参加したことが特筆される。

一方、9月にはユーゴスラビアの文化省が主催する、ベオグラード国際演劇祭（日本大使館が連携）に国際交流基金からの派遣講師として増田正造、A・ニコフスキーズが参加し、講演を行い、同演劇祭には③も参加した。派遣の両講師は9月8～9日のユーゴの人民大学、ベルグラード大学での講演のあと9月14～15日、西ベルリンの楽器博物館でスライドとテープを併用しつつ講演、鹿島映画「世阿弥」のドイツ語版も上映した。この公演は、比較音楽研究所・ベルリン芸術祭・日本大使館の主催。国際交流基金の派遣による講演は、メキシコ（沖縄舞踊団における三隅治雄）・アフリカ（民族舞踊団における本田安次）の例はあるが、ヨーロッパへは今回が初めてであった。

三公演の概要は左の通り。公演名、公演地、期間、公演回数、主な演者（シテ・ワキ・囃子・狂言）、上演曲目の順である。

①アメリカ・カナダ親善能楽団　カナダ（バンクーバー・トロント）・アメリカ（ボストン・ニューヨーク・イサカ・ロサンゼルス・サンフランシスコ・テキサス・インディアナ・ミシガン）。50年2月12日～3月末。11回。喜多節世・森茂好・藤田朝太郎・幸義太郎・国川純・小寺佐七ほか。「羽衣」「留」半能「熊坂」。

②野村狂言団　カナダ（オタワ）・アメリカ（ニューヨーク、シカゴ、ワシントン、シアトル、ポートランド、ロサンゼルスなど）・メキシコ・アルゼンチン・チリ・ブラジル。50年3月28～5月20日。38回。野村万之丞・万作・茂山千五郎・正義ほか。和泉流「棒縛」「くさびら」、大蔵流「瓜盗人」。

③日本能楽団　イラン（シラーズ）・スイス（チューリッヒ）ユーゴスラビア（ベルグラード・プッーイ）・西ドイツ（ベルリン・ハンブルグ）。50年8月28日～9月23日。15回。梅若万三郎・梅若泰之・浦田保利・上田照也・森茂好・田中一次・大倉長十郎・筧鉱一・三島太郎・茂山千五郎ほか。「鷺」「葵上」「羽衣」「棒縛」「瓜盗人」。

受　賞

昭和50年度（第30回）の芸術祭は能楽部門の参加公演が九つで昨年度より二公演増え、特に地方からの参加公演が増えた。今年度も芸術大賞はなく、優秀賞が①西日本金剛会「金剛流公演能」（鷺・土蜘蛛・箕被ほか。豊島豊・大蔵弥太郎ほか）と、②銀座狂言会「第12回銀座狂言会」（川上・素袍落・昆布売。和泉保之・三宅藤

九郎・善竹忠一郎ほか）の企画と成果に対し、および③喜多秋季別会能の「景清」の成果に対し、それぞれ贈られた。授賞理由は次のとおり。①は〃意欲的な企画のもとに、適切な選曲と骨太な演技で観客をよく楽しませ、その舞台成果にはみるべきものがあった〃、②は〃舞台空間を生かした演目を選定し、善竹忠一郎ら他流との競演によって成果をたかめ、また親しみやすい解説を加えるなど、その企画と出演者一同の舞台成果は見るべきものがあった〃、③は〃シテ喜多長世の意欲的な演技に対して各役が協力、特にワキヅレ工藤和哉のひかえめで誠実な演技はみごとで、全体によく調和した舞台成果をあげた〃というもの。なお、4月7日には第31回（昭和49年度）の芸術院賞が喜多実に贈られた。

また、第27回アカデミア賞（文化部門）が梅若六郎に贈られた。能楽界から初の受賞。同賞は社団法人全国日本学士会（会長・東海大学総長松前重義）が毎年、学術・教育・文化・産業の各部門に業績を積み社会に貢献した人々を選んで授与するもの。授賞理由「多年古典芸能の研究とその大衆化に努め、わが国の演能界の発展と日本古典芸能文化の発展に尽くした業績」。

日本能楽協会々員（昭和50年能楽協会会員名簿による）

【シテ方】 三四九名このほか休11、準1名〔観世流885（休9）金春流83　宝生流151（準1）　金剛流74（休2）　喜多流56〕

【ワキ方】 六四名このほか準1名〔高安流25　福王流18　宝生流16（準1）〕

【笛方】 四六名〔一噌流10　森田流31　藤田流5〕

【小鼓方】 五八名〔幸流26　幸清流11　大倉流13　観世流8〕

【大鼓方】 四九名〔葛野流16　高安流10　大倉流10　石井流11　宝生錬三郎派2〕

【太鼓方】 三六名このほか準1名〔観世流14　金春流22（準1）〕

【狂言方】 九三名このほか休1名〔大蔵流66（休1）　和泉流27〕

○東京支部522（準3休6）　名古屋支部91　北陸支部50　京都支部191（休3）　大阪支部287（休2）　神戸支部59　本部175（休2）

物故者

飯山　嘉俊

○シテ方観世流（準職分）。昭和五十年二月十一日、脳溢血のため東京・大森の自宅で死去。享年五十三歳。能楽協会会員。

岡　久雄

○シテ方観世流。昭和五十年二月十三日、急性白血病のため東京・逓信病院で死去。享年六十一歳。日本能楽会会員。観世会理事。能楽協会理事。能楽養成会教務として後継者育成に務めた。

菱田　尚三

○シテ方宝生流。昭和五十年二月十九日、心臓発作のため東京・小平市の自宅で死去。享年五十六歳。

牛窓　隆司

○本名、牛窓悦蔵。能楽写真家。昭和五十年二月二十八日、心不全のため京都・北野上七軒の自宅で死去。享年七十二歳。

阪倉篤太郎

○京都大学名誉教授。御題小謡作者。昭和五十年三月八日、老衰

のため京都・吉田下大路町の自宅で死去。享年九十五歳。

那須　辰造

○児童文学者。実践女子大学教授。昭和五十年四月五日、脳出血のため東京・世田谷の大脇病院で死去。享年七十歳。随筆集「能を愛する」（わんや書店刊）が没後に刊行された。能楽懇談会会員。

橋岡泰次郎

○シテ方観世流（休業中）。橋岡雅雪二男。昭和五十年四月三十日、心不全のため死去。享年七十五歳。能楽協会会員。

福田　源平

○シテ方観世流（準職分）。昭和五十年五月五日、死去。享年七十七歳。日本能楽会会員。

信貴　英蔵

○能楽養成会および大阪能楽養成会会長。昭和五十年五月十七日、心不全のため東京・恵比寿の自宅で死去。享年八十八歳。大阪出身。三菱製紙顧問。宝生会専務理事。昭和29年、能楽養成会発足とともに副会長、同34年に会長となり、能楽三役の後継者育成に功績があった。42年、勲四等旭日小綬章を受章。日本能楽会審議委員。従五位、銀杯一個（勲三等相当）に叙せられた。

林　甲子生

○シテ方観世流（師範）。昭和五十年八月五日、心不全のため名古屋・今池町の自宅で死去。享年五十二歳。

入江　美法

○能面作家。昭和五十年九月三日、心臓発作のため東京・赤堤の自宅で死去。享年七十九歳。下村清時・観山に師事。能面作家の第一人者。昭和47年、勲五等瑞宝章、同48年、東京作家クラブの第11回文化人間賞を受賞。著書に「能面検討」（昭和18年春秋社刊）がある。

浅見　重信

○シテ方観世流。昭和五十年九月十九日、脳腫瘍のため東京・本郷の順天堂大学付属病院で死去。享年五十八歳。日本能楽会会員。東京芸術大学邦楽科教授。観世会理事。勲四等瑞宝章を追贈された。

江島伊兵衛

○わんや書店取締役会長。能楽研究家。鴻山文庫主人。昭和五十年十月十日、心筋梗塞のため東京・港区の済生会病院で死去。享年八十歳。（詳細は別記事参照）

梅若新太郎

○本名、西村真三。シテ方観世流。昭和五十年十一月一日、心筋梗塞のため東京・松原の自宅で死去。享年七十三歳。梅若研能会理事。日本能楽会会員。

仙田雪山子

○本名、仙田茂。能楽画家。昭和五十年十一月二十三日、京都・安井病院で死去。享年七十歳。菊地契月に師事。帝展七回、文展三回入選。総合展賞・東海奨励賞等を受賞。